

## サッカー代表試合観戦記

盛田 常夫

ハンガリーはヨーロッパの古豪で、日本はいわばサッカーの新興国。1964年の東京オリンピックでハンガリーは優勝し、日本が銅メダルを取ったメキシコ五輪では、準決勝で負けた相手がハンガリー（ハンガリーが五輪二連覇）。東京五輪は 1-5、メキシコ五輪は 0-5 の惨敗だった。1996年のアトランタ五輪の予選リーグでブラジルを 1-0 で破った日本は、ナイジェリアに敗れ、ハンガリーと引き分けたために、決勝トーナメント進出を逃した。1993年のキリンカップでも 0-1 で敗れ、ハンガリーが優勝している。

ハンガリーのクラブチームに勝ったことは何度かあるが、いまだフル代表も五輪代表も日本はハンガリーに勝ったことがない。Jリーグ発足や W 杯 16 強の日本が、どれほどの実力差を見せることができるか、それが今回の代表戦の一つの興味だった。

### ハンガリー側の戦況評価

3 日後に控えた対ブラジル戦で陰が薄くなった日本戦だが、ハンガリーのサッカーファンはテレビ中継でブラジル戦に向けた代表チームの仕上がり具合を見ていた。試合翌日の各紙とも日本戦の試合経過を大きく取り扱い、ほとんどが「ふがない試合で、審判の助けを借りて漸く勝利」という見出しを付けた。きわめて厳しい評価を下している。

両チームとも、前半はボールが落ち着かず、攻守のメリハリのない展開で見所は少なかった。後半、セットプレイから 2 点が決まり、このままゲームが終わっておれば、「見所は少なかったが、まずはマテウス・ハンガリーの勝利を祝おう」となったところだが、リードしてほどなく守備陣がかき回されて 2 点を連取され、ハンガリーは代表チームの現実に引き戻された。以後は日本ペースで進み、2 点リードした時点の高揚は完全に雲散霧消してしまった。勝ったとはいえ、押されまくった後の疑問のペナルティだから、喜べない。

各紙とも、ロスタイムでのペナルティは、「審判のプレゼント」と断定している。録画リプレイで「シミュレーション」が明瞭だから、「祝える勝利ではない」というのがハンガリー・メディアの評価。今、ハンガリーの代表チームに必要なのは闇雲の勝利ではなく、組織的に機能するサッカーなのだ。その課題は何も解決されていないということだろう。

### 日本チームの闘い振り

国際的な檜舞台から見放されているハンガリーから、日本チームは初勝利を予定していただろう。日本の組織的なサッカーをやれば、落ち目のハンガリーを押し切れると考えていた。が、簡単に勝たせてもらえないだろうとも思っていた。準備不足でアウェーで簡単に勝てるほど、欧州は甘くないという悪い方の予感が当たった。

双方のチームとも、国外組が参加できない今回の対戦は、事実上、Jリーグ選抜対NB(ハンガリー・リーグ)選抜。久保と磐田の4選手の合流が試合直前になり、かつDFの要になる宮本と中沢が負傷で、出発間に茶野と田中(誠)が代替招集された。ブダペストでは久保が合流しても13人。紅白戦もできない。各国リーグが最終ステージを迎えている中で組まれた日程だから仕方ないが、ハンガリー戦の目的が疑問視される状況にあった。

前半はほとんどサッカーをさせてもらえなかった。「意外とプレスがきつかった」というのが日本の選手たちの反応。アジアの弱小チームを相手にすると、本場のヨーロッパのチームを相手にするのでは話が違う。世界ランク70位前後でも、ヨーロッパはこの程度の水準だと分かっただけでも収穫だろう。

前半は中盤が機能していなかった。藤田が潰されてボールをキープできないから、ゲームを組み立てられない。左サイドの三都主と右サイドの西から配給されるクロスが唯一のチャンス。もっとも、前半の早い時点で獲得した三都主のフリーキックが決まっていれば、ゲームの流れは変わっていた。前半に限れば、久保は何もできなかった。唯一のチャンスは終了間にゴール正面で受けたパス。真正面すぎたが、ここは決めて欲しかった。

ゲームは後半に動いた。ハンガリーが上げた2点はセットプレイから。1点は仕方ないとしても2点は余計だ。相手の突進にたいして右DFの坪井が一步競り負け、フリーキックを与えるという場面が何度かあり、結果的にその一つが得点に結びついた。時折、ペナルティエリア近くでマークがずれるなど、急造DFラインの弱点が見え隠れしていた。

もしこのまま0-2で敗退すれば、いかにJリーグ選抜で急造チームとはいえ、ジーコ監督の進退問題になっただろう。収穫なしの完敗に終わるところだった。勝ちを意識して守りに入ったのか、仕事をさせてもらえなかった藤田を本山に変えてから、日本に攻めのリズムが出てきた。前線での球回しが速くなり、パスをつないでハンガリーの守備陣を崩した玉田の1点目はお見事。この失策の混乱が収まらない中の速攻で久保が2点目を入れ、ジーコ・ジャパンはかろうじて面目を保った。結果的に国内組のトレーニングになった。連続的な流れの中で得点できたことは大きい。セットプレイからの得点には運が付いて回るが、連続プレーでの得点はコンビネーションから生まれるものだからだ。

ロスタイムのペナルティで茶野の国際経験の浅さが出た。体を寄せることは大切だが、主審の視線に死角があるから、接触を避けつつ寄せるという技術と判断が必要だった。

## 応援団をフリーガン扱い

日本の応援団に洪サッカー協会が用意したのは、いわゆる「フリーガン席」。アウェーの応援団を隔離するセクターを割り当てた。ザラエゲル市やチケットの取り纏めをおこなっていたBELL Houseなどが要望した「日本の応援団にはVIP席近くの一角を」という願いを一顧だにせず、機械的にこの席を割り当てた。再考の要望にたいして、協会事務局は、「FIFAの規定にしたがって、この席を割り当てる。日本人とハンガリー人が混ざって観戦することは許されない。これ以外の席は日本人に販売しないし、すべてチケットは売り切れてい

る。それで嫌なら、日本人に来て貰わなくて結構」という官僚主義的態度に終始した。主催者として、万が一のことが起こった場合の責任を取れないから、隔離されたこの一角を日本の応援団に割り当てる。それ以外の余計な配慮はしないということ。この一角に陣取った応援団は吹きさらしのスタンドで、強い北風に凍えながら、ゲームを観戦することになった。ザラエゲル市が日本企業と日本人のために企画したプログラムや座席確保の提案はことごとく協会から却下された。他方、主催者 VIP 席に座るはずの洪サッカー協会役員が来場していた様子はない。洪サッカー協会の言動は何とも理解しがたい。

### FIFA という御印籠

見ての通り、会場は六分の入り。「売り切れ」というのは口からの出任せ。正面スタンドは空席が多かった。確かに日本の応援席は警官で囲まれていたが、それはスタジアムの中だけ。ゲームが終わった後は、スタジアムの外ですぐにハンガリーの応援団と合流した。場外での誘導警備は皆無。もし何か事件が起こるとすればスタジアム周辺の可能性がよほど大きいはずなのに。要するに、洪サッカー協会はスタジアム外の出来事には責任を持たなくて良い。だから準備していない。「事なかれ主義」を絵に描いたようだ。

FIFA のチケット問題は W 杯で経験済みだが、ここでも同じだ。ブラジル戦の高いチケットなどはどこをどう出回っているのか良く分からない。日本戦にはかなりの準備時間があったのに、チケットが出来上がったのは試合 10 日前。日本側の要望にたいして事前に相談したり、事情説明したりすることなく、チケットをもって来て、後は問答無用。遠方から来る客人にたいするサービスは一切ゼロ。その気になればどんなことだってできるはずだが、そういう意思も気遣いも準備もまったくない。

ハンガリー人の気が利かないことは分かっているが、それでもせっかく遠方から来る客人はそれなりのもてなしを受けるものと考え。少なくともザラエゲルセグ市の皆さんは、何とか日本の客人をもてなそうと考えた。ところが、サッカー協会はこれっぽっちも考えていない。良い席を 500 席確保して、その両サイドを防御することだって簡単にできる。しかし、協会にとってこんな配慮は余計で面倒なこと。官僚主義、事なかれ主義は、社会主義時代に普遍的に見られた現象だった。今でも公的機関の窓口で苦情を言うと、「議論したいなら列の最後尾に付きなさい」という権威主義的な常套文句がある。洪サッカー協会の脅し文句は「FIFA の御印籠」。こういう機関や組織を相手に交渉するのは至難の技だ。

こんな経験をしてみると、もしかして、ハンガリー・サッカーの長期沈滞は、選手の問題より、協会の問題なのではないだろうかと思えてくる。クラブ経営者が利権を握り、協会は権限を有効に発揮できる体制になっていない。だから、組織としての協会の対応が機械的官僚的で、FIFA の権威主義をそのまま受け売りするだけ。面倒なことが予想される場合には、「FIFA の御印籠」を掲げるだけ。ハンガリー人でなくともこの現実は悲しい。

哀れなり FIFA の威を借る 洪協会  
駄目駄目づくしで 無為無策

この種の問題はスポーツ団体にありがちなことだが、国立フィルハーモニー、オペラハウス、オペレッタ劇場など音楽機関や Herend などは、日本を最上のマーケットとしているから、サッカー協会のように横柄な態度をとることはない。良いマネージャーやコーディネーターを得た組織は生き生きしているし、仕事もうまく行っている。それにたいして、マネージャーに人を得ず、旧態依然とした組織や活動をおこなっている機関は、社会主義体制が崩壊した後も、活動は停滞したまま。サッカー協会などは、その典型例だろう。棚ぼたで持ち込まれる国際マッチを場当たりのにやっているだけなのだ。

もっとも、日本でも多くのスポーツ団体は封建的な仕来りで動いているところが多い。プロ野球機構も組織として機能しているとは思われない。組織を動かす人は良く考えて欲しいものだ。